

琥珀の風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

観光力を磨く

82

2014 November

特集

観光力を磨く

3 視点 「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくり 観光地域づくりプラットフォーム推進機構会長 清水慎一

5 地域一丸となって民泊による体験型修学旅行を誘致 広島湾ベイエリア海生都市圏研究協議会 山口県周防大島町

8 組織の力を生かし観光しやすい環境を整備 一般社団法人鳥取市観光コンベンション協会 (鳥取市)

10 豊かな歴史と自然を資源に泊まれる観光地を目指す (鳥根県奥出雲町)

12 歴史ある建物を再生し魅力を増す宮島町家通り (広島県廿日市市)

14 「地域に生きる企業家群像」 池田精工株式会社 代表取締役 池田晃 (岡山県鏡野町)

18 「キラリ、輝く元気企業」 55 高品質・高機能のナイロン樹脂で世界市場を広げる宇部興産 (山口県宇部市)

20 「夢紡人/ゆめつむぎびと」 78 高校魅力化プロジェクトで「グローバル」な若者を育て地域に活力を生み出す岩本悠さん (鳥根県海士町)

23 「この名酒にこの一品」 5 純米大吟醸 山頭火・ふぐ刺し (山口市)

24 「古地図で読むまち」 5 米子 (鳥取県米子市)

26 「ローカル線探訪」 11 姫新線 (兵庫県姫路市たつの市佐用町・岡山県美作市勝央町・津山市・真庭市・新見市)

28 「国宝の旅」 17 荒神谷遺跡出土品 (鳥根県出雲市)

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていきたいと思います。強くないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

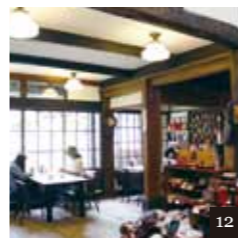
碧い風

あおいかぜ

82

2014 November

contents



特集

観光力を磨く

「住んでよし、

視点

訪れてよし」の

観光地域づくり

観光地域づくりプラットフォーム推進機構会長

清水慎一

観光立国宣言

二〇〇三(平成十五)年、小泉内閣により「観光立国」が宣言され、「観光」が初めて政策の組上(そじょう)に載って以来、国は観光政策に積極的に取り組んできた。安倍内閣においても、二〇一四(平成二十六年)六月に「観光立国実現に向けたアクション・プログラム2014」―「訪日外国人2000万人時代」に向けて―が決定した。国の動きに呼応して、各地でも「観光交流人口の拡大による地域活性化」、すなわち「観光振興」は主要な政策課題になった。今では、ほぼすべての自治

体に観光を主管する担当課(他の業務を含めて主管する場合も含む)があり、八割強の自治体に観光協会がある。

観光の現状

観光の現状は、好景気の影響もあって順調に回復している。二〇一三(平成二十五)年の国民一人当たりの国内宿泊観光旅行回数は一・四三回、国民一人当たりの国内宿泊観光旅行宿泊数は二・三五泊で、減少傾向からようやく脱し、増加に転じた。訪日外国人旅行者数は一千三十六万人と、初めて年間一千万人を突破した。その結果、訪日外国人旅行消費額は一・四兆円で昨年比べて三十一%増加し、日本人国内旅行消費額についても二十・六兆円で四%増加した。

しかし、観光振興の取り組みにもかかわらず、バブル崩壊以降の低迷した状況からいまだに脱することができない業種や観光地もある。例えば、宿泊業のうち旅館業の市場規模は縮小を続けており、二〇一二(平成二十四)年度の売り上げは一・四兆円と、ピークだった一九九一(平成三)年度の四割にまで落ち込んだ。(公益財団法人日本生産性本部編「レジャー白書」)旅館業の規模縮小は、その集積を誇っていた温泉地の衰退を加速し、かつての

メジャーな温泉地の中にはいまだに苦境から抜け出せない所もある。また、観光客の入込数が増えている所でも、地域全体でその効果を持続できずに、「観光立地」の掛け声だけが空回りしている地域も散見される。これら地域が十分な成果を挙げられない理由は、ほとんどが観光客の動向やニーズの変化に的確に対応できていないからだ。

「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくりとは

観光客の動向やニーズは急激に変化している。旅行形態が団体から個人・グループに変化しているだけでなく、観光客の嗜好は「まち歩き」という言葉に象徴されるように、観光施設の周遊だけでは飽き足らず、地域に滞在しながらまちの雰囲気を楽しむ、地元のおいしい食を楽しむようになってきた。このような観光の急激な変化に対応するには、観光客をじっくりと滞在させる、「地域ならではの歴史や文化に育まれた暮らし」を味わってもらい、住民との交流を楽しませる「滞在交流型」の観光振興策が肝心だ。ところが、地域における観光振興策をみると「行政」「行政の補助金で成り立つ観光協会」「旅館組合などの観



大分県由布市では、湯の坪街道の景観や交通事情の改善のため、地区住民が主体となって「湯の坪街道周辺地区景観計画」を策定 写真提供:ツーリズムおおいた

●表紙写真:鳥取市観光コンベンション協会
●目次写真提供:周防大島町、奥出雲町、林田 悟、佐野 明美、米子市観光協会、岡山県観光連盟
●表紙デザイン:久原 大樹 (広島市在住)
*本誌は環境に配慮した用紙を使用しています。

「光事業者」の三者を中心にして、一過性のイベントやプロモーションに取り組み、観光施設の整備に力を入れ、発地の旅行会社に送客を依頼する従前のやり方に終始しているケースがいまだに多い。

これでは、今の観光客を満足させることができないし、住民にも不満が残る。なぜならば、ガイドら多様な住民や農協、商店街などさまざまな団体が参画できる仕組みがないと地域の多様な資源が生かされず、滞在交流に対応した「新たな価値」が提示できないし、地域全体で観光振興の成果を十分享受することができないからだ。また、発地の旅行会社と組んで集客を図る、従来の仕組みではマーケティングの動きやニーズをつかむ力とはならない。

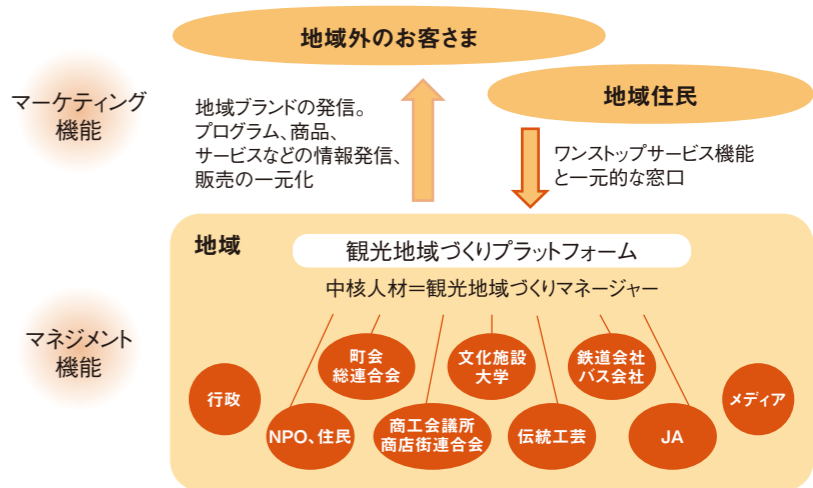
これからの観光振興策では、地域自らが豊かで住みやすいまちを目指して「地域ならではの歴史や文化」を大事にし、それらを観光資源としてコーディネートするなど、まちを挙げて主体的に観光交流に取り組む活動が必要である。これを「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくりという。

観光地域づくりの実現に向けて

「住んでよし、訪れてよし」の観光地域

観光地域づくりプラットフォームの概念

(地域の人材や資源を引き出し、マネジメントし、一元的に顧客や市民に発信する場)



づくりに取り組むに当たって重要な点は以下のとおりである。

一つ目は、住民自らが誇りに思う、その地域ならではの歴史、伝統文化、自然に育まれた暮らしや食、すなわち「地域らしさ」を大事にし、磨き上げ、発信することである。成功事例のまねでは世界から選ばれる魅力ある観光地にならないし、住民の誇りは醸成されない。

二つ目は、そのような「地域らしさ」を体感できる滞在プログラムを、住民

自らが観光客に提供することである。地域独自の価値に根差したプログラムでなければ、観光客は満足しないし、リピートしない。また、住民自らが観光客と一緒に「地域ならではの暮らし」を楽しむ工夫がなければ、長続きしない。

三つ目は、「地域らしさ」を体感できる公共空間を美しく磨く「まちづくり」に、官民を挙げて取り組むことである。観光客が第一歩を踏み出す駅前や港、道の駅周辺の町並みがどこでもあるようなつまらない風景や空き家だらけの寂れた商店街では幻滅だ。住民が心から誇りに思うような、その地域ならではの歴史、伝統文化、暮らしを生かした美しく、活気ある公共空間づくりが大事だ。

四つ目は、地域の多様な団体や住民と一緒に地域独自の価値を磨き上げ、発信するとともに、観光の成果を地域全体で享受する持続的な仕組みを創り上げることである。観光客のニーズなどのマーケティングが不十分のまま、行政や各団体がバラバラに対応しても観光客を満足させることはできないし、

地域全体のマネジメントが不十分な取り組みでは、地域全体の成果につながらない。

これらの点に留意しながら、行政と一緒に地域の多様な住民や団体がまちづくりの論議を積み重ね、着実に観光交流につなげ、その成果をみんなで享受する仕組み、すなわち「観光地域づくり」を持続的に進める仕組みを「観光地域づくりプラットフォーム」という。このような仕組みがうまくいくためには、マーケティングとマネジメント能力を有し、一連の動きをまとめて引張っていく中核人材が不可欠なことは言うまでもない。



profile

清水 慎一 (しみずしんいち)
1972年東京大学法学部卒業、日本国有鉄道入社。1987年JR東日本入社、同取締役営業部長、取締役仙台支社長。2004年株式会社JTB常務取締役就任、2011年退任。2008年から2013年まで立教大学観光学部特任教授を兼任。現在、立教大学観光学部兼任講師、内閣府「地域活性化伝道師」など。国土交通省「離島振興基本方針策定有識者懇談会」座長を務めた。

特集

観光力を磨く

地域一丸となつて民泊による体験型修学旅行を誘致

広島湾ベイエリア・海生都市圏研究協議会
山口県周防大島町

多島美が魅力の広島湾域では、圏域内の官民が一体となり、民泊による体験型修学旅行の誘致活動を展開している。山口県周防大島町で本格的に始まった取り組みは圏域市町に広がり、年間七千人を超える中学・高校生に島や山間地の自然と暮らしを体感してもらっている。

“海からの視点”で連携

広島商工会議所の呼びかけで「広島湾ベイエリア・海生都市圏研究協議会」が発足したのは、二〇〇〇(平成十二)年七月。海で結ばれている広島湾域での官民一体の連携と交流によって、にぎわいを創出するのがねらいだ。広島・山口両県の七市六町の行政や商工会議所・商工会、活動の趣旨に賛同する企業・団体等で組織している。

「瀬戸内の海からの視点」に立ち、経済界主導で、行政の枠組みを超えて活

動しているのが特色です。最初に取り組んだのは地域資源調査で、広島湾域の魅力を掘り起こし、発信していくことにしました」と同協議会の設立当初から運営委員長を務める中村成朗さんは振り返る。

地域資源調査を受け、クルーズ船で湾域の島々を巡る「海から行く、歴史探訪」を七回実施。広島などの都市住民に広島湾域の魅力をあらためて認識してもらおうとともに、湾域の住民同士の交流を深めた。その成果を弾みに、全国からの滞在客を増やす仕掛けとし



中村成朗運営委員長

て協議会が目指したのが、体験型修学旅行の受け入れである。二〇〇七(平成十九)年から誘致活動を開始した。「広島には原爆ドームと厳島神社の二つの世界遺産があり、平和学習に年間三十万人以上の修学旅行生が訪れています。しかし、広島には泊まらず、他県の観光地へ移動するケースが増えていきました。広島に宿泊させるにはどうすればいいのか。検討した結果、瀬戸内海



カヌー体験 写真提供:周防大島町

の豊かな自然や環境を生かした多彩な体験プログラムを提供し、島々に滞在して住民の方々と交流してもらおうというところになったのです」と中村さん。

協議会メンバーで先進地視察や研究を進め、農家や漁家にホームステイして家業などを体験する民泊・体験型修学



西村さん宅で漁網の準備 写真提供:周防大島町

学旅行の受け入れに結び付けた。それに伴い、広島においても前後泊の形で宿泊が増えているという。

周防大島町で民泊を開始

海生都市圏研究協議会の動きにに応じて体験型修学旅行受け入れの先陣を



みかんの収穫作業 写真提供:周防大島町



椎木町長



西村さん夫妻

大人の体験型旅行にも期待

「民宿をやってみたくてという夢を持っていたので、婦人会で町から話があったときは真っ先に手を挙げました」と美奈子さんは笑う。一方の俊幸さんは、あまり乗り気ではなかったと打ち明ける。「怪我をさせたらどうするのかという心配が先に立ち、また、漁の繁忙期は対応できないと思ったからです」

それでも美奈子さんに背中を押されてやってみると楽しく、達成感や充実感があった。気付くと、年間十回以上受け入れるようになっていた。「一回で四人から五人を受け入れていますが、多いときには、月に五回受け取るともありました」と俊幸さん。

子どもたちを漁船に乗せ、建て網漁や沖釣りを体験させる。獲った魚は子どもたちにさばかせ、食卓に並べてみんなで味わう。美奈子さんは、生活の力や食の原点を学ぶ絶好の機会になっていると話す。

「命をいただくのだから、恵みに感謝し、残したらいかんよ、と論じます。魚嫌いだと言っていた子も、おいしいってきれいに食べてくれるんです」

また、自分たちが当たり前だと思っていたことに感動する子どもたちの姿から、あらためて仕事のやりがいを感じ、島の良さに気付かされたという。

切った自治体の一つが、山口県周防大島町である。

山口県東南部に位置する周防大島町は人口一万八千人。瀬戸内海では淡路島、小豆島に次ぐ面積を誇る周防大島(屋代島)と周囲五つの有人島、二十五の無人島からなり、農業、漁業、観光を基幹産業にしている。

「美しい自然と景観に恵まれ、みかん栽培や、タイやイワシ漁などの沿岸漁業が盛ん。海と山の両方の体験ができるのが売りです。本土とは橋でつながっている交通の利便性は高く、三つの町立病院を擁して医療機関も充実しています」と、周防大島町の椎木町長は町の特色と利点を強調する。

体験型修学旅行受け入れに当たっては、町や商工会、観光協会、観光事業者、受け入れ町民などで構成する周防大島町体験交流型観光推進協議会を設立し、受け入れ家庭の募集や研究会、体験プログラムの整備などを進めた。「苦労したのは、体験や民泊の受け入れ家庭の確保です。賛同する町民を募りましたが、反応は鈍いものでした」と椎木町長。「何を体験させればいいのか、食事はどうするのか、多感な中学生や高校生にどう接すればいいのか、事故があったらどうするのか」と尻込みする町民に対し、「過度のもてなしや

課題は、受け入れ家庭の確保。高齢化に伴って対応できなくなる家庭の増加が予測されるからだ。町では掘り起こしに力を入れたらと意気込む。

「将来的には、民泊の経験を生かして民宿の営業許可を取る所が増えることを期待しています。そうなれば、体験型修学旅行だけでなく大人の体験型旅行も誘致でき、通年観光によって交流人口の大幅な拡大が望めます」と椎木町長は夢を膨らませている。

目標は年間受け入れ一万人

山口県に続き広島県も民泊の取扱指針を策定したことで、広島県内でも民泊・体験型修学旅行の受け入れが広がっている。二〇一二年以降、江田島市が新たに受け入れたのははじめ、大崎上島町、安芸太田町、北広島町でも取

お客さま扱いは不要。ありのままの姿を見せて、体験させればいい」と粘り強く説得していったと話す。

初めて受け入れたのは二〇〇八(平成二十)年十一月で、神奈川県私立中学校の修学旅行を誘致。町内のホテルに二泊した生徒二百十五人にカヌーや農業、漁業などを体験してもらった。「普段見慣れた島の景色や暮らしに感懐する都会の子どもたちの姿に町民も刺激され、受け入れ意欲が高まってきました。そして、翌年から民泊に取り組むことになり、同じ神奈川県私立中学生百八十三人が五十五軒の受け入れ家庭に分かれて泊まり、農業や漁業などを体験しました」

生活の力と食の原点を学ぶ

山口県の民泊の取扱指針に基づき、教育旅行等に限っては民泊に営業許可は不要となっているが、町では受け入れ家庭を対象に安全や衛生、交流などについての研修会を毎年実施している。現在、受け入れ家庭は二百八軒に上る。体験内容は各家庭に任せており、農家では田植えや稲刈り、みかんなどの収穫、漁家ではイワシ網漁や建て網漁、磯釣りなどが体験できる。

漁業を営む西村俊幸さん・美奈子さん夫妻は、町の民泊実施翌年度から修学旅行の誘致活動に拍車をかけている。「安芸太田、北広島の間接地が加わったことで体験プログラムの幅が広がりました。また、五地域が連携することで、大規模校の受け入れも可能になりました。旅行代理店からの要望に応じてワストップでコーディネートできるのも私たち協議会の強み」と中村さんは強調する。

受け入れ地域では、自治体を中心に官民で地元協議会をつくらせて受け入れ体制を構築。広域組織の海生都市圏研究協議会が首都圏・中部圏・関西圏の旅行代理店へのプロモーションや誘致活動、コーディネート役を担い、受け入れ確定後は地元協議会でしっかり対応する役割分担が図られている。県境を超えた広域連携で、商工会議所がインシアティブをとって民泊・体験型修学旅行の誘致を進めているのは、全国でもここだけだという。

「目標は年間受け入れ一万人。現在、七千人を受け入れています。誘致競争が激化する中での達成には、リピーターを増やすことが大事。圏域全体で切磋琢磨し、魅力を高めていきたい」と中村さんは意欲をみせている。



修学旅行生を見送る周防大島の住民 写真提供:周防大島町

観光力を磨く

組織の力を生かし 観光しやすい環境を整備

一般社団法人鳥取市観光コンベンション協会《鳥取市》

観光客を集めるには、観光スポットの情報発信だけでなく、観光客が訪れやすい環境整備が必要である。鳥取市観光コンベンション協会では、地域に根差した組織として着地型観光の推進に取り組んでいる。



砂の美術館 第7期展示ロシア編



サポートセンターで千円タクシーを申し込む外国人観光客

楽しんだ後、昼食を挟み、山陰海岸学習館や砂の美術館、鳥取砂丘などを回る。帰りは、JR特急や飛行機の出発便に間に合うように鳥取駅または鳥取空港に着く。昼食付きで費用は大人一人三千円。七月から十一月までの毎週日曜日と祝日の月曜日に運行し、非常に好評だという。

外国人向けの 周遊タクシーツアーを実施

インバウンドにも力を入れている。鳥取駅前に設置した鳥取市国際観光客サポートセンターは、英語、韓国語、中国語、ロシア語に対応。外国語対応のスタッフが常駐し、広域の案内ができることから、日本政府観光局（JNTO）の外国人観光案内所（ビジット・ジャパン案内所）カテゴリ2に認定された。

また、外国人観光客向けに三時間千円の周遊タクシーツアー商品も用意している。海外でのプロモーション活動でも、この千円タクシーの認知度が高まり、特に韓国や香港、台湾から利用客

が増えてきているという。

「海岸線に面した鳥取砂丘の起伏のある景観は、世界的に見ても珍しく、鳥取観光の核となるものです。ただ、日本に初めて来るお客さまを、京都や東京ではなく、鳥取に呼び込むにはまだ認知度が低い。広島にはヨーロッパからも観光客が多く訪れているので、もう一歩足を延ばしてもらえるように工夫していきたい」と小谷さん。そのためには、外国人の目線で鳥取の景観を見て洗練させていくことや、彼らのニーズをきちんと把握することが大切だという。

「実際、鳥取に来る外国人観光客は、日本に何度か来ている人が多い。彼らの日本の食事や習慣への親和性は高いので、もう一歩踏み込んだ提案をすれば、面白いインバウンドになるのではないかと語る。

観光教育で人材育成

鳥取砂丘に加え、主要な観光スポットとなっているのが砂の美術館である。砂の彫刻である「砂像」を公開するため二〇〇六（平成十八）年に砂丘の一角に野外美術館として誕生した。毎年テーマを変え、世界トップクラスの砂像彫刻家が集まって作品を制作し、展示



小谷文夫会長

第三種旅行業登録で 着地型観光商品を開発

これまで任意団体であった鳥取市の観光協会は、二〇一二（平成二十四）年四月に一般社団法人鳥取市観光コンベンション協会になった。法人化後、収益的事業の一つとして取り組んだのが第三種旅行業登録である。その背景について、会長の小谷文夫さんは次のように話す。

「観光業は小規模な民間事業者が多いため、個々の力だけで現状を打開するのは非常に難しい。母体となる協会がスケールメリットを生かし、行政と一緒に施策を行うことで、鳥取の観光振興に寄与できるのではないかと考えました」二〇〇七（平成十九）年の旅行業法改正によって、第三種旅行業においても、区域限定で国内の募集型企画旅行が実



鳥取因幡Gバス

施できるようになった。催行区域には営業所のある市町村だけでなく、隣接する市町村まで含まれる。そのため鳥取市の場合、三朝温泉のある三朝町や浦富海岸のある岩美町、岡山県津山市や兵庫県新温泉町などを回るツアーバスなどを企画することができる。

「鳥取の交通は決して便利ではないので、来られたお客さまの現地での移動手段の確保は不可欠です。市内にも旅行会社はありますが、その多くは、県内のお客さまの海外・国内旅行の手配を事業にしています。着地型観光は、利益を出すのが困難です。だからこそ、財政や人員面で支援のある協会で行っています」

法人化してからの二年間は試行錯誤だったが、今年から本格的なツアーバス「鳥取因幡Gバス」の運行を開始した。三朝温泉やわい温泉、鳥取駅を出発地とし、浦富海岸のクルージングを

する。二〇一二年から常設展示の美術館（展示期間は四月から一月）へと姿を変え、二〇一三（平成二十五）年は五十五万人を超える観光客が入場し、砂の彫刻を楽しんだ。

運営を担う鳥取市観光コンベンション協会では、美術館スタッフの人材育成にも注力する。来訪客に十分に楽しんでもらえるように細かなサービスを心掛けており、他の施設にとっても「おもてなし」の模範となることで、全体のレベルを引き上げていきたいとしている。

さらに、市や協会、商工会議所で組織する部会のもと、観光のおもてなしを学ぶ講座「鳥取市観光大学」を実施している。タクシードライバーや、宿泊施設や観光施設のスタッフ、ガイド希望者らを集め、二カ月に及ぶ講義と現地研修を行い、鳥取の観光資源、おもてなし、外国人観光客への接し方などを学ぶ。試験の合格者には、観光マイスター

の認定証が授与される。千円タクシーのドライバーの中には観光マイスター認定を受けた人が多く、観光客へのアンケートでも応対が良いと評価が高い。

自動車道の全線開通で 広域の集客が可能に

鳥取県では、二〇一三年三月に鳥取自動車道が全線開通し、通過型観光から滞在型観光への移行がより重要になってきている。市においても、これまで大きな市場であった関西方面からの観光客は日帰りが増えたという声も上がっている。しかし、首都圏や名古屋方面、広島県、山口県からの宿泊客が増え、より広域の集客が可能になった。団体旅行から個人旅行へと変化していく中で、協会が果たす役割は大きいと小谷さんは話す。

「個人旅行客を増やすには、情報発信が大切。ただ、単純に情報を発信するだけではなく、Gバスのように、それらを組み合わせて観光への動機付けがしやすい環境を作り上げることが必要です。お客さまがそこに行きたくなるような魅力のある確かな情報提供と環境整備に力を入れていきたいです」

組織として会員事業者を引っ張るためにも、地域に根差した旅行業の実践が今後も期待される。



鳥取市観光大学の講義風景

観光力を磨く

豊かな歴史と自然を資源に 泊まれる観光地を目指す

《島根県奥出雲町》

奥出雲には、たたら製鉄由来の棚田の景観や豊かな食、希少な自然景観や歴史的建造物など見どころが多くある。光る要素を歴史という糸でつなぎ合わせながら、泊まれる観光地を目指す動きが始まった。



木々が色付く「たたら製鉄師」の歴史資料館・絲原記念館 写真提供:絲原記念館



鉄穴流しによってつくられた棚田が残る佐白 写真提供:奥出雲町

出雲神話ゆかりの地 奥出雲

出雲大社が六十年に一度の大遷宮を迎えた二〇一三（平成二十五）年、島根県全体の観光入込客数は、前年比二十六%増の三千六百八十八万人と大幅に増加した。「神々の国」「縁結びの聖地」といったキャッチフレーズも浸透し、その歴史や文化に惹かれて今も全国から多くの人が訪れている。

その出雲大社から南東へ、古代神話の源流をたどっていくと、ヤマタノオロチ神話の舞台である奥出雲町に着く。古事記では、須佐之男命が高天原から降臨し、ヤマタノオロチを退治して、この地の榎名田比売と結ばれたと語られる。ここ奥出雲町の佐白は、その神話の伝承地が数多く残る場所だ。佐白は、山腹に広がる棚田が印象的

な山あいの里である。江戸時代、たたら製鉄が行われていたころ、この場所は人馬が往来する重要な街道沿いのまちであった。松江藩主を数回迎えていることから、文化が成熟していたと考えられている。

たたら製鉄では、膨大な量の炭を使うため、山林の輪伐が行われた。伐採後、元の山に戻るには三十年はかかる。奥出雲では、その跡地を利用してそばが植えられた。このそばを松江藩主は大変気に入ったとされ、辛味大根の栽培や器の工夫など独自の文化が発展した。そばのまちとしても有名になった奥出雲町では、そばマップで手打ちそばが食べられる店十数軒を紹介している。

たたら製鉄の原料となる砂鉄は、山を崩して土砂を水路に流し、沈殿させて採取する。棚田の多くは、この鉄穴流しによって造られたものだ。この辺りの土壌は、採掘で荒廃するのではなく、鉄などミネラルを含むことで、豊かな土壌に変化した。奥出雲特産の仁多米がおいしいと評価されるのも、土地の恵みによる。

棚田を眺めると、こぶのような小さな丘が点在していることに気付く。これらは墓地や神社の鎮守の森で、信仰の対象として削らずに残した鉄穴残丘である。奥出雲の悠久の歴史と人々の

自然博物館館長の宇田川和義さんは語る。

「泊まれる博物館」をキャッチコピーに宿泊幹旋サイトに載せたところ、その珍しさもあつてすぐに予約が入った。中国地域の他にも大阪、兵庫、東京、福岡などからも訪れているという。土日は県外客が多く、夏休み期間は毎日満室が続く状態だ。宿泊客数も年々伸び、二〇一三年の宿泊客数は約五千人となった。

博物館は観光施設だけでなく、パーティーや研修、町内行事などを行う地域施設としても活用されている。「これからの施設は地域と連携して、総合的に機能しなければいけない」と宇田川さん。

歴史と自然に恵まれた奥出雲町。町を挙げて観光スポットのタイアップに力を入れており、泊まって楽しい観光地への変貌が図られている。

文化財に指定された。また、紅葉も美しく、十一月七日から九日にかけてはライトアップして公開される。

ロケ地としても活用される 絲原記念館

奥出雲の歩みと切り離すことができない。たたら製鉄の歴史を当時の建物や庭園とともに学べるのが絲原記念館である。絲原家は松江藩主の五鉄師の一人に任ぜられ、鉄師頭取も務めた旧家である。記念館では、たたら製鉄資料の他、絲原家が伝承してきた美術工芸品を見ることが出来る。

隣接する絲原家の居宅は、延床面積約四百九十三坪、部屋数約四十室を誇る大邸宅である。江戸時代後期に建築された松江藩主の本陣として利用された客殿棟や、書院・二の間・三の間の三間続きの客間を持ち、国の登録有形



ナイトミュージアムに生まれ変わった奥出雲多根自然博物館



館長の宇田川和義さん 化石の展示スペース

泊まれる博物館で 全国から集客

奥出雲町では歴史的景観の保全だけではなく、自然景観の整備にも力を入れている。

鬼の舌震は、巨岩や奇岩が約二キロにわたって続く大渓谷で、奥出雲を代表する観光スポットである。二〇一三年には、バリアフリー遊歩道と、高さ四十五メートル、長さ百六十メートルの「舌震の恋吊橋」が全開通し、車い

すでも散策できるようになった。

観光地として収益を上げるには、滞在型観光への移行が大切だ。奥出雲町で、そのキースポットとして注目されるのが、奥出雲多根自然博物館である。二〇一一年（平成二十三）年にリニューアルを行い、ホテルとレストランを併設。「ナイトミュージアム」として生まれ変わった。さらに、二〇一二年（平成二十四）年には近隣に「佐白温泉長者の湯」がオープンし、より滞在しやすい環境が整えられた。

奥出雲多根自然博物館は、地元企業家、多根良尾氏の遺志を継いで建てられた。宇宙の進化と生命の歴史をテーマに、恐竜の実物骨格標本や世界の化石・鉱物などのほか、日本宇宙フォーラムと連携した宇宙開発情報も展示されている。デジタルサイネージやタブレットなどITを活用し、楽しみながら学ぶインタラクティブな展示システムが特徴だ。

「親子で博物館を回りながら、会話をし、空想する。きれいな星空の下でゆっくりと過ごせば、充実したひとときを過ごせるのではないだろうか」と奥出雲多根



舌震の恋吊橋 写真提供:奥出雲町



鬼の舌震 写真提供:島根県観光連盟

観光力を磨く

歴史ある建物を再生し 魅力を増す宮島・町家通り

《広島県廿日市市》

年間四百万人を超える観光客が訪れる宮島には、歴史や文化に関心の高いヨーロッパからの観光客も多い。表参道の裏通りにある町家通りは、建物の保存・再生で落ち着いた町並みを取り戻し、人気を集めている。



町家通り。左には旅館かわぐち



にぎわう町家通り(右下) [厳島図会より]

観光客数の更新が続く宮島

広島県を代表する観光スポット、宮島の観光が好調だ。年間観光客数は、二〇〇七（平成十九）年に三百万人を突破、その後も増加し続け、二〇一二（平成二十四）年には約四百四万人、二〇一三（平成二十五）年には約四百八万人と過去最高を記録している。

とりわけ目立つのが外国人観光客数の増加である。一九九六（平成八）年に厳島神社が世界文化遺産となり、二〇〇七年に発行されたミシュラン観光ガイドで三つ星付きで紹介された。廿日市市では、外国人観光客の集客に力を入れており、ビジット・ジャパン事業でのプロモーションや、外国人スタッフの登用などを行ってきた。さらに、フランス政府観光局が作成した日仏交流一五

〇周年のポスターが縁となり、二〇〇九（平成二十一年）年にモン・サン・ミッシェルとの観光友好都市連携を結び、交流が図られている。

古い建物の保存・再生で散策する観光客が増加

宮島において、落ち着いた町並みを味わえる場所として近年人気になりつつあるのが、町家通りである。フェリー乗り場から厳島神社へとつながる表参道商店街の東側にある裏通りで、住民の生活道路でもある。江戸末期から明治に建てられた古い建物や、現代的に再生された建物が並び、各戸には、可愛らしいイラストに町家通りと書かれた行燈（あんどん）が付けられている。

一八四二（天保十三）年に出版された「厳島図会」を見ると、この町家通りは当時のメインストリートだったことが分かる。描かれた町家で現存しているものが何軒もあり、歴史の古さを感じさせる。

こうした町家通りの良さを再認識し、町並みに生かそうという動きが始まったのは、今から十数年前のこと。その端緒となったのが、通りが一番北側にある、「ゲストハウス菊がわ」の再生であった。

バブル崩壊後、それまでの「古いもの

弥山（みせん）に登ったり、町並みを散策したりとゆつたりと過ごす場合が多いという。

景観に配慮し維持管理に取り組む

ぎやらしい宮郷が完成したころ、島の人も含めた有志約十名で「町並みを考える会」を発足した。元来、重要伝統的建造物群保存地区指定に向けて設立された会であったが、会の活動が契機になって通りに活気が生まれ、若い人が移り住んで店を開くようになってきた。町家通りの目印となる行燈の絵は、有志で費用を出して、数カ月に一回張り替えている。

これからさらに魅力的な通りにするにはどうするか。そのポイントの一つとして、宮郷さんと福島さんは、維持管理を挙げる。今年、ぎやらしい宮郷は、ひろしまの魅力ある建築を県が選定する「ひろしまたてものがたり」一〇〇セレクションに選ばれた。

「一〇〇セレクションに選ばれたことはとても光栄なこと。これからは景観を考えながら、維持管理をしていかなければいけない」と福島さんはこの先を見据える。

町家通りの歴史を次世代に継承すべく、町並みを守る取り組みが少しずつ実を結んでいる。



ゲストハウス菊がわ

が、改修後はネットや口コミで評判が広がり、外国人観光客に大人気の宿となっている。

観光客の交流の場

さらに二〇〇三（平成十五）年には、「ぎやらしい宮郷」がオープンした。町家三軒が連なるこの建物は、二百五十年の歴史を持つ。もともと杓子（しゃしこ）の間屋で、近隣に職人たちが住んでいた。会社を移転したあと長らく空き家になっていたが、福島さんに依頼し、カフェギャラリーに改装した。ギャラリーの隣には、中庭に面したカフェがあり、かつて生産していた杓子がインテリアに使用されている。骨董小物を陳列し、ショップも併設した。

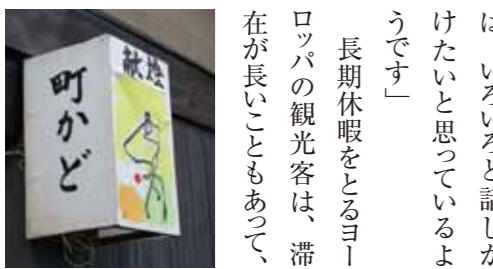
開店後、すぐに通りの交流の場となった。店が開いていると、散策する日本



ギャラリーで外国人観光客と交流



宮郷素子さん



通りを飾る行燈

ば、いろいろと話しかけたいと思っっているよです」

長期休暇をとるヨーロッパの観光客は、滞在が長いこともあって、

二〇〇〇（平成十二）年に完成した「旅館かわぐち」は、「厳島図会」の金鳥居の辻にも描かれている歴史ある旅館である。昭和時代の改修で古材をセメントなどで覆い隠していたため、再生工事で建材を一つずつはがしていくと、立派な建材が次々と見つかった。それらを生かしながら大改修し、和風の落ち着いた宿へと生まれ変わった。以前は、修学旅行生向けの旅館であった



必要とされる仕事に全力で応える

池田精工株式会社 代表取締役

池田 晃

〈岡山県鏡野町〉

**お客さまを満足させる
製品づくりが営業になる**

「困ったら岡山のあの会社に行ったらいい」
そう助言を受けた技術者たちが、図面を片手に駆け込む企業が鏡野町にある。大手企業の生産機械の主要部品を数多く手掛ける池田精工である。
「よく、『最近の設計者は加工のことを知らないから難しい設計図を描く』と嘆かれる方がいますが、私は、設計者は理想の図面を描いてくれればいいと思っています。できないことが出てくれば、われわれができる方法を提案しますから」



精緻な加工技術を用いた製品

文：城市 奈那 写真撮影：林田 悟（岡山市在住）

企業家は控えめに、しかし自信に溢れた表情で語った。ステンレス加工一本で事業を続けてきた池田晃社長（74歳）だ。
「うちには営業部がないんです。でも、これまでのお客さまや同業者の紹介で、仕事が次々と舞い込んでくる。だから社員には、お客さまが満足のいく製品を納めることが一番の営業なんだと絶えず言っています」

製造業を支える生産機械。その一番難しい部品や心臓部を池田精工は簡単につくり上げる。設計者にとって最後の望みとなるような企業なのである。

**地域や日本のために
何ができるか**

久米町に生まれた池田社長は、農家の三男という立場から、中学卒業後は就職することを漠然と考えていた。そうした折、父親から「少年自衛官」の養成学校を紹介される。勉強しながらお金をもらえるならそんないいことはないかと受験するも、身長が規定に足りず、結果は不合格。そして、津山工業高校の機械科に入学した。

「ただ、少年自衛官を受験したことで、私の中で変化が生まれました。個人よりも団体、地域や日本のために自分何ができるのかという考え方が芽生えたんです。高校二年生のときには、将来

故郷で会社を興すと公言していました」
その気持ちはずっと池田社長を支え続けてきた。独立を視野に入れ、高校卒業後は大阪の中小企業に就職。しかし、先輩からいじめを受け、新卒入社十五人のうち、半分は一カ月で退職した。労働環境も決して良いわけではない中で、なんとか我慢して勤務していたが、半年後には退職する。

しかし、知り合いのついで、神戸のある会社を紹介してもらい、面接に行った。偶然にも、その社長は鏡野町出身で、すぐに気に入られ、就職が決まった。

「その前の半年があまりにもみじめだったので、新しい職場は楽しくて仕方なかったです。ここでの五年間の体験が、私のすべてになっています」

半年間は現場で機械の操作を教わり、その後は社長の助手として、経営を学ぶ。見積もりの出し方や営業の仕方、材料の手配から工程まで、ノウハウを一对一で教わった。

時代に翻弄された日々

しかしそうした日々も長くは続かなかった。東京オリンピックが開催された一九六四（昭和三十九）年、まだ全国で学生運動が激しかった時期に、労働組合への加入をめぐって社員が対立する。働きたい社員が会社の外に閉め出される

profile

池田 晃（いけだ あきら）

1940年岡山県久米町（現津山市）生まれ。1959年津山工業高校卒業。大阪、神戸での会社勤務を経て、1972年池田鉄工所創業。1979年池田精工有限会社設立。1984年株式会社アイ・エスを設立。1989年池田精工が有限会社から株式会社に組織変更。現在、グループ全体で売上高10億円、従業員81名。



アイ・エス工場内

ことで、仕事ができない状態が続いた。さらに、発注元から仕事を引き揚げられたことで、倒産の危機に直面する。

経営意欲を失ったその社長は工場を閉鎖してしまい、池田氏は反発する組合との労働争議に巻き込まれた。半年後、組合との和解をめぐって、今度は池田氏が反発し、職を失ってしまう。

その後は創業を見据え、社長見習いとして数社を転々とする。前社で労務管理に苦労した点を買って採用してくれた会社もあった。自分に技能がなければ事業はできないと思い、従業員二人の小さな会社に飛び込み、鉄工業界の基礎的な機械である旋盤の操作を教えてもらったこともあった。

高校生のころから抱く、故郷で会社を興すという夢。時に時代の波に吞まれながらも、その夢を実現するために、前を向いて着実に歩みを進めていった。

大手企業の移転で ステンレス加工に移行

一九七二（昭和四十六）年の末に勤めていた会社を辞め、翌年四月に鏡野町で池田鉄工所を創業した。

転機になったのは、創業の二、三年後に津山市にステンレスの製造用機械メーカーが移転してきたことだ。仕事を受注し、本格的にステンレス加工に移行

ては、一個の部品でもできないことはない。要は頭の柔らかさです」

「設計者は理想の図面を描いてくれればいい」——この思想は、どんな部品でもつくれるという池田社長の自信の証しだ。

「お客さまが新しい図面を持ってきたときには、こうした方がいいと遠慮なく言います。逆に、お客さまからもっといい方法はないですかと聞かれることもあります。これがわれわれの営業ですし、やりがい。『池田精工さんのおかげで、他社に勝てた』と言われると、天にも昇る気持ちになってしまいますね」と笑みを浮かべる。

東証一部上場企業との取引は、直接取引だけでも十数社になった。「各業界のピラミッドのてっぺんにある企業と取引をしたい」という池田社長の理想は、ほぼ現実になりつつある。

ステンレスクラスターで 津山の人材を育成

バブル崩壊後、津山の産業界も他と同じく景気が落ち込んでいったが、ステンレスだけは右肩上がりに成長していた。そこで、ステンレス加工を津山のリーディング産業にしようとして、つやま新産業創出機構の下、共同受注グループの「津山ステンレスネット」が一九九七（平成九）年に設立された。池田社長は設立時か

した。

「その当時津山には、ステンレス以外の仕事はなかったのだから自然の成り行きでした。ステンレスは難削材ですが、その分やりがいがありました」

一九七九（昭和五十四）年には池田精工有限会社を設立。その後、受注先の企業から、専属会社の設立を依頼され、一九八四（昭和五十九）年に、サニタリー部を株式会社アイ・エスとして独立分離した。

「ただ、上限を決められてしまうと、それを超えるように仕事をしたくなるのが人間です。そこで、他の仕事を求めて地域を飛び出したところ、ある企業と出合いました」

自社の技術に自信を持ち 勝負をかける

岡山県中小企業振興協会（現岡山県産業振興財団）の視察旅行で、石川県金沢市のある企業を見学した。医薬品・食品の充填・包装設備や工作機械の設計・製造を事業とする大手企業だ。その工場に、津山の発注元の機械があった。主力部品はほとんど池田精工で手掛けていたため、「これは私の製品ですね」と池田社長は大胆に発言した。

協会の人にも加勢して褒め称えたこともあつてか、後日、その企業から「会社から現在まで会長として、技術補完の連携と向上に努めている。」

さらに二〇〇七（平成十九）年には「ステンレスネット」を進化させ、大手企業も加えた二十三社と津山高専、工業技術センター、つやま新産業創出機構が一体となって「津山地域を日本のステンレスの加工基地へ」をビジョンとして、「津山ステンレスクラスター」が設立された。「製造業においては、固有技術の積み重ねや技術革新が新製品開発につながります。人をいかに育てるかというのは大きな課題。ステンレスクラスターでもステンレスに特化したメニュー開発、人材育成に力を入れています」

優秀な技能を持つ社員が講師となり、他社の社員に技術を教える。津山圏域全体のレベルを上げたいという社長の言葉は、次世代へのメッセージでもある。

新鮮な刺身のような仕事を

生産拠点の海外移転で、日本のものづくりの空洞化が危惧されている。池田社長も「技術は国内にとどめなければいけない」と、危機感を持つ。一方で、仕事は淘汰されるとも感じている。「いつも新鮮な刺身のような仕事をしよう」と心掛けています。すぐに必要になる製品や、設計と同時につくりはじめられるような仕事です。逆に、つくり置きが

を見に行きたい」と電話がかかってきた。工場を案内し、製品を見せたところ、見学の直後に材料と図面が送られてきた。そこからトントン拍子に取引が始まった。

「津山で鍛えられていたので、その会社の機械を見たときに、これならわれわれは絶対に勝ると自信を深めました」

相手企業の期待に全力で応えることで、取引は徐々に大きくなっていった。「最初のころは、納入する部品は数点だけでしたが、今では大部分の機械部品を池田精工が納入しています。地元と同業他社との違いを明確化するために、全社を挙げて取り組みました」

現在、その企業は飲料用ペットボトルの充填設備で全国シェアの大半を占めている。

柔らかい頭で考える

他社がつかれない部品を早く、安く、しかも簡単につくる。池田精工の高い技術力、発想力の源は何だろうか。池田社長に尋ねると、「私のものづくり方は皆さんと少し違っているかもしれない」と照れながら答えた。

「できなければ、できるようなやり方でやる。これが私の発想です。例えば、あるパーツは三個の部品を組み合わせたことでできなくともできます。でも考え方によ

できるもの、誰でも簡単にできるものは国内には残らないでしょう。特に自動車以外の消費財は、外国に太刀打ちできないと思つていきます。機械はどんどん進化していますが、機械ではできない仕事はまだたくさんあります。われわれはそれに挑戦し続けなければなりません」

起業して四十二年。日本のものづくりの歴史とともに歩んできた池田社長は、力強い視線で未来を見据えている。



大型充填装置部品



加工が難しいチタンを水圧で成形する技術を確立し、義歯床に応用（現在開発中）



池田精工布原工場

高品質・高機能のナイロン樹脂で 世界市場を広げる宇部興産

《山口県宇部市》

総合化学メーカーとして日本の産業の発展と世界のものづくりを支えている宇部興産株式会社。創業の地に建つ宇部ケミカル工場では、中核基盤事業の一翼を担うナイロン樹脂や医薬品、精密化学品などを生産している。中でも原料のラクタムから製造されるナイロン樹脂の生産能力は世界屈指、アジアではトップを誇っている。

「無限の工業」へ拡大

宇部興産の歴史は、山口県宇部の海底炭田の開発に向け、地元の人々が出資して一八九七（明治三十）年に設立した匿名組合組織「沖ノ山炭鉱」から始まる。その後、採炭を支える機械の製造と保守を行う会社、石灰と周辺の石灰石でセメントを製造する会社、石灰を原料に肥料となる硫酸を製造する会社が設立され、一九四二（昭和十七）年にこの四社が合併して宇部興産株式会社が生じた。

以来、「共存同業」「有限の鉱業から無限の工業へ」という創業の理念の下、化学を中心に、建設資材や機械・金属成形、医薬、エネルギー・環境の分野で事業を推進している。生産拠点も千葉、堺、さらにはスペイン、タイなどへと広がり、グローバル総合化学メーカーとして大きく成長した。同社の生産品と技術は、デジタル家電や自動車部品などの身近な製品から社会インフラ整備、最先端の航空宇宙分野まで幅広く活用され、私たちの暮らしと世界のものづくりを支えている。

その広範な事業における中核基盤事業の一つとして、高付加価値化による競争優位性と需要の拡大が見込まれているのがナイロン事業である。同社発祥の地の宇部に建つ工場を中心に、日本、スペイン、タイの三極体制でナイロン原料のラクタムとナイロン樹脂を製造し、世界へ送り出している。

平野裕一さんは説明する。

ナイロン6の製造工程は、重合塔内で原料のカプロラクタムを水と熱で重合させ、水あめ状になったナイロンを冷やして粒状にカットし、重合しなかった原料除去のために水洗いした後、乾燥させるといふ流れ。ナイロン12もほぼ同じ工程だが、原料はほとんど重合するので水洗いは行っていない。

平野さんは「生産プロセス自体はシンプルですが、低粘度から高粘度まで幅広いグレードのナイロンを製造するので、生産管理と運転管理には細心の注意が必要です。独自方式として、二つの重合塔で連続二段重合を行っているのが当社の特徴。二番目の重合塔で重合を調整することで幅広いグレードに対応でき、品質も安定します。生産性が高いのも強み」と強調する。

強靱で加工性に優れる

製造されたナイロン6は「UBEナイロン6」、ナイロン12は「UBESTA（ウベスタ）」として供給され、市場で高い評価を得ている。

「ナイロン樹脂は、エンジニアリングプラスチックの中で最も強靱で、耐熱性、耐油・耐溶剤・耐薬品性に優れています。何より大きいのは、加工しやすく、複雑形状品の成形に適しているこ

世界第三位の生産能力

宇部興産がナイロン樹脂の販売を開始したのは一九五九（昭和三十四）年のことだ。その四年前に新設した宇部カプロラクタム工場にパイロットプラントを整備し、アンモニアなどからつくられたカプロラクタムを原料に「ナイロン6」を製造し商品化した。その後、ラクタムなどを原料にした「ナイ

ロン12」の製造にも着手。宇部カプロラクタム工場は一九八五（昭和六十）年に宇部ケミカル工場となり、現在、ナイロン樹脂の他、医薬品や精密化学品、高機能樹脂、電池材料など百二十種類の製品を製造している。

「当社のナイロン6の生産能力は宇部の工場年間五万三千トン、スペイン、タイを合わせると十四万八千トンと、世界第三位です。一方のナイロン12の生産能力は年間一万吨で、生産しているのは世界で四社、アジアでは当社だけです。共に原料から一貫生産しています」と生産統括部宇部ケミカル工場ナイロン製造グループリーダーの

給している。

「自動車の軽量化と電気・電子部品の増加、アジアなど新興国市場の成長等に伴い、ナイロン需要は広がっています。それに応えるためにも品質と機能性をさらに高め、ナイロン製造五十年以上の歴史の中で培ってきたUBEナイロンブランドに磨きをかけたい」と

中村さん。

平野さんも「付加価値の高い製品は宇部で開発・製造し、その技術をスペインやタイの生産現場に発信して欧米やアジアの市場ニーズや特性に応じた製品づくりを進めます」と話す。

世界のUBEのナイロンビジネスは、さらなる進化に向かっている。



宇部ケミカル工場 写真提供:宇部興産株式会社



粒状にカットされたナイロン樹脂



ナイロン6から作られた自動車部品等 写真提供:宇部興産株式会社



ナイロン12から作られた製品 写真提供:宇部興産株式会社



宇部ケミカル工場内のナイロン樹脂工場 写真提供:宇部興産株式会社



原料のラクタムを重合させる重合塔

高校魅力化プロジェクトで「グローバル」な若者を育て 地域に活力を生み出す岩本悠さん

雄大な自然と独自の生態系が世界ジオパークに認定された島根県隠岐。その島の一つ、中ノ島の海士町で、教育を通して人や地域の成長を目指すプロジェクトが推進されている。地域に根差した「グローバル」な発想が、過疎化・少子高齢化の進む島の学校や人を変えていく。



profile

岩本 悠(いわもと・ゆう)
1979年東京都生まれ。
2006年より隠岐島前高校魅力化プロデューサー。
大学時代に20カ国を巡り、その体験記「流学日記」(文芸社・幻冬舎)を出版。その印税でアフガニスタンに学校を建設。
趣味は神楽。

文:山根 美佳(島根県出雲市在住) 写真撮影:佐野 明美(島根県松江市在住)

※グローバル…グローバルとローカルを合わせた造語。国境を超えた地球規模の視野と、草の根の地域の視点でさまざまな問題を捉えていこうとする考え方。

雄大な自然と天皇ゆかりの島 隠岐島前

彼方に続く紺碧の海原に、白波を描きながらフェリーは進む。夏から秋にかけての日本海は穏やかだ。島前と島後の群島からなる隠岐諸島は世界第一級の景勝地「摩天崖」や名勝「赤壁」が雄大な姿を現す地であり、後鳥羽上皇や後醍醐天皇が御遷幸された歴史を持つ。二〇一三(平成二十五)年九月には、国内六カ所目の世界ジオパークに認定された。隠岐島前は、知夫里島(知夫村)、西ノ島(西ノ島町)、中ノ島(海士町)の三島を中心とした島根半島の北約六十キロメートルに位置する島々だ。

その海士町に、近年、全国から若



上空から見た隠岐島前高校の全景 写真提供:隠岐島前高校

者や子育て世代のUターン者が集まり、今や人口二千四百人の約一割を占めているという。しかし、六年前までは少子高齢化、生産年齢人口の減少、地方交付税の減額などにより財政再建団体転落への構図が描かれていた。それを覆したのは二〇一三(平成二十四)年に初当選した山内道雄町長の大胆な行政改革、地域資源を利用した産業創出であり、「隠岐島前高校魅力化プロジェクト」の推進だった。

そのプロジェクトのプロデューサーとして島に着任したのが岩本悠さん(35歳)。当時、ソニー株式会社の人材育成の部署に所属していた。「海士中学校で出前授業をしたときに島前高校の存続問題を知り、いろいろなアイデアを出していたら、島に来てやってみてほしいかと言われて……」出前授業で島を訪れたのは二〇一六(平成十八)年五月。その年の十二月に移住した。

教育が人や地域を変える

岩本さんは東京に生まれ育ち、大学は教育学部に進学した。しかしあるとき、教員になることに疑問を持った。「海外での体験を通してもっと視野を広げ、自分の人生のミッションを明確にしたかった」と振り返る。

岩本さんは大学を一年間休学し、アジアやアフリカなどを巡った。飛び込みと国際機関やNGOの紹介で二十カ国を訪れ、インターシッパやボランティアで地域活動を体験した。その中で紛争や貧困、環境などグローバルな課題に直面しながら、自分に何ができるのか自問自答を繰り返した。結果、「学びを通して人が成長すること、地域や社会、世界を変えていく」という方向性を見いだしたのだった。

大学に戻った岩本さんは、幼稚園から高校までの教員免許を取得し卒業すると、企業に就職した。「学校教育は、社会で自己実現、社会貢献を果たしていける人を育てるのが目標の一つ。自分が学校の中しか知らなかったら、学校内でのいい子は育てられても、社会で活躍できる人材を育てられるのか疑問に思った」と岩本さん。

こうした海外、企業での経験が岩本さんの礎となり、隠岐島前高校を通して、魅力ある地域の実現につながっていくのだった。

隠岐島前高校魅力化プロジェクトの始まり

隠岐島前高校は、島民の熱意と運動により一九五五(昭和三十)年に

県立隠岐高校の分校として開校した。それまでは経済的に余裕のある家庭の子どもだけが島外で高校進学をしていたが、その開校により島の多くの子どもたちが高等教育を受けられるようになった。

しかし、都市部への人口流出で島の人口は減少し、かつて三百人を超えていた生徒も、二〇〇八(平成二十)年には入学者が三十人を割る。このままでは県の統廃合基準を下回るのは時間の問題だった。そこで立ち上げられたのが、「隠岐島前高校魅力化プロジェクト」であり、岩本さんはそのけん引役を担った。

「学校の存続は、過疎化・少子高齢化が進む島前全体の存続問題でもあります。学校のない島に若い世代が子どもたちを連れて移住することは考え難い。そうすると、人口減少の歯止めになってきた移住・定住政策も崩れます」

岩本さんは、まず島民の危機感の醸成と意識の共有を図った。そして、「ピンチを教育改革と持続可能な未来づくりを進めるチャンスに変えよう」と、住民、行政、各種団体と共に組織づくりを始めた。それは単なる県立高校の存続事業ではなく、魅力ある学校と地域づくりのスタートだった。



金光酒造株式会社

創業 1926(大正15)年
山口市嘉川5031番地
TEL 083 (989) 2020
http://www.santouka.com
年間生産量 500石 (90kL / 5万升)



種田山頭火の句が飾られた販売スペース

1)の美酒2)の一品 5

山口県

純米大吟醸 山頭火

ふぐ刺し



地域住民と一緒に無農薬の米づくり 写真提供: 隠岐島前高校



地域の課題解決に向けたプロジェクト会議 写真提供: 隠岐島前高校



観光甲子園グランプリを受賞 写真提供: 隠岐島前高校

地域資源、住民を最大限に生かした取り組み

高校魅力化プロジェクトの取り組みには、十項目が掲げられた。

その一つは、「島には仕事がないから帰れない」という従来の意識から「自分の町を元気にする仕事をつくりに帰りたい」といった地域起業家精神を持った若者の育成だ。「島全体が学校」「地域の人も先生」などをコンセプトに、「地域学」「地域地球学」といった授業を新設し、グローバルな人材を育成。地域の課題を解決するために、世界の技術やノウハウなどグローバルな視座を結び付ける課題解決型学習を実践している。

「島の課題を探究していくと、実は日

本の構造を反映していたり、縮図だったりする。世界的な問題にも帰着します。ここでの実践は、もっと広い社会や世界のさまざまな問題解決のヒントになるとともに、世界でも通用する力を鍛えることになっていきます」

こうした取り組みは、生徒たちによる観光企画「ヒトツナギ」に発展し、第一回観光甲子園でグランプリ(文部科学大臣賞)を受賞した。今では世界唯一の部活動となり、町の商品開発、ツアー企画、ガイドブック発行などにも波及している。

一方で、学力向上とキャリア教育を旨とした学校地域連携型公立塾「隠岐国学習センター」を開設した。毎日、就業後に寺子屋形式で個々の志望や能力に合った学習、地域社会の問題解決

の春の入学生は五十九人。その半分が島外からの受け入れです」

島の子どもたちは都会の生徒から刺激を受け、留学生は、たくましく生きる知恵や人間力を島で身に付ける。離島の不利な点はアドバンテージに変わり、今や異例の学級増を果たし二クラス体制となった。昨年は、卒業生三十九人中、十三人が国公立、早慶など難関大学に進学している。

持続可能な地域を目指す

卒業生たちは地域に誇りと愛着を持ち、いつか島に帰り、自分たちで地域を元気にしていこうと思うようになった。それは、この地域の価値を再発見したからだ。そして、島前高校で育ったグローバルな人材が次の世代

に向けた議論が行われている。

また、全国から生徒を受け入れる「島留学」も大きな特徴だ。

「昨年は問い合わせが五百件を超え、都会の説明会にも多くの参加がありました。二〇一四年(平成二十六年)

を育て、地域の活力が連綿と未来へ引き継がれていくことを願い、岩本さんたちは「新魅力化構想」を作成した。「僕自身、この島に来て変わりました。焦って何かをするのは、結果的に持続可能な成果を生まないことにも気付きました。三十年後もこの学校が存続するために、その土地の歴史や伝統、文化を継承しながら、常に新たな価値を加えて未来につないでいくことが大切だと思っています」

この取り組みが大きくなるとなり日本中に飛び火して、いろいろな地域が教育を通してさらに魅力的になっていくこと。それが現実となる日を夢見て、岩本さんは今日も島の人々と汗を流し、新しい発見を重ねている。



手付かずの大自然の中で育つ隠岐牛

山根 美佳(やまね みか)

1963年島根県生まれ。フリーライター・エディター。淑徳短期大学社会福祉学科卒業。地元のCATVの制作部を経て独立。情報誌「さんいんキラリ」などに執筆。編著「松江の六人衆」(今井出版)。

「月が酒が からだいつばいの よろこび」

この句を詠んだ放浪の俳人、種田山頭火は山口県西佐波令村(現防府市)の大地主の家に生まれた。放蕩の父が銀行から金を借りて一緒に酒造りを始めたものの、山頭火は酒を腐らせてしまい、借金ゆえに夜逃げをしようとした。その種田酒造を買収した、ある酒造と後に合併したのが、金光酒造である。

五代目の金光明雄社長のモットーは、地産地消の、地元を大切にしたい酒造り。特に酒米にはこだわり、山口県オリジナル酒米の西都の雫のほか、山田錦、五百万石、日本晴などそのほとんどで県内産を使用する。

併せて、地元の人と一緒に酒を醸しむ機会を設け、常にお客さまの声に耳を傾けてきた。蔵開きに始まり、七月には「冷やガーデン」、九月にはお月見会と、季節に合わせてイベントを開催。さらに最近では、住民と一緒に田植え、稲刈りをした米を使った酒を「嘉穂の酒」として

販売し、好評を博している。

ここで紹介



するのは、「純米大吟醸 山頭火」。精米歩合は四十%、華やかな香りと艶やかな味わいを持つ大吟醸である。この名酒と一緒に薦められるのは、県を代表するふぐ刺し。ふぐの弾力ある食感が味わえる一品だ。

「米のうま味が少しあって、のど越しの良いうちの酒は、さっぱりとしたふぐ料理と抜群に合う」と金光社長も太鼓判を押す。

原酒のため、アルコール度は十六〜十七度と他の酒より少し高い。十℃ほどに冷やすのが基本の飲み方だが、ロックにして少し薄めて飲む女性もいるという。それぞれの好きな飲み方をきちんと把握しているところに、地元に着した金光酒造らしさが出ている。

郷土が生んだ偉大な俳人の名を銘柄に冠してから、来年で四十周年を迎える。酒造の前には、山頭火直筆の句碑が設置され、俳人ゆかりのスポットの一つになっている。

歩き疲れた体を休め、月を眺めながら、日本酒を飲む喜び。月を肴に名酒「山頭火」をたしなめば、漂泊の旅人の気分が味わえるかもしれない。

米子



鳥取と島根両県の県境に位置する米子は、江戸時代から商業地として栄えてきた。その後道路や鉄道の発達で都市化が進んだが、現在もあちこちに往時の面影を残している。

海運業が栄え 商業のまちとして発展

米子城の築城と城下町づくりは、一五九一（天正十九）年、西伯者の領主となった吉川広家によって始められた。広家の下で、元の港町を基に町割りが行われたが、一六〇〇（慶長五）年に広家が周防国岩国へ国替えを命じられた。

代わって伯耆国領主となったのが中村一忠である。わずか十二歳の一忠に代わり、家老横田内膳正村詮らの手で城下町の整備が進められた。米子城下町の基礎が築かれたのはこの時期だと考えられている。しかし内

膳は一六〇三（慶長八）年、側近から言を受けた一忠によって殺害される。

一忠（元服後の公式名は忠一）は一六〇九（慶長十四）年、二十歳の若さで急死した。中村家は断絶し、美濃国黒野城主加藤定泰が伯耆国会見・汗入郡領主となるが、七年後に伊予国大洲に転封となる。その後、一六三二（寛永九）年に池田光仲が鳥取藩主となり、家老である荒尾氏が米子城預かりとなるころには、すでに城下町の基礎はできていたようだ。米子は荒尾氏の「自分手政治」が行われる中、米子港を中心に海運業が栄え、商業のまちとして発展した。

水運を利用した町割り

江戸末期の「米子領地面全絵図」を見ながら現在の米子を歩くと、現在のまちの基礎が米子城下町時代にあることが分かる。

米子城の北側には①内堀と②外堀が描かれている。内堀は一八八九（明治二十二年）ごろ埋め立てられて水田となった。現在は道路となつている。外堀は、東半分は埋め立てられているものの、③加茂川（現在の旧加茂川）との合流地点から西は今も残る。

内堀と外堀の間は武士の居住区で、「ちよう」（丁・町）と呼ばれていた。鳥取藩から派遣された米子詰めの組士は東側に、荒尾氏の家臣たちは西側に住んでいた。古地図には屋敷を構えた家臣の名前が並んでいる。また④「田」と書かれた広い区画は「屋敷田」と呼ばれ、借家住まいの人々によって耕作されていた。米子には城主がおらず、城下町が整備された中村氏時代よりも武士が減つたため、空き地が増えて耕作地へと変わったのである。このように堀の内部を武士の住居地とする城下町は、幕藩体制初期に新設された城下町に多い。

外堀の外は町人の居住区で、「まち」

と呼ばれていた。城下を東西に通る山陰道沿いと、それに直行する「中筋」を主体とした、城を横手に見る「横町型」の城下町である。山陰道沿いに博労町、新町（現在の糶町）、道笑町、日野町、茶町、塩町、大工町があり、これと直交して中海に至る道沿いには法勝寺町、紺屋町、四日市町、東西倉吉町、尾高町、岩倉町、立（堅）町、灘町がある。内堀の中に内町と天神町があった。十八の町名のうち十七が、現在まで引き継がれている。



米子城跡から見下ろす市街の風景

日野町、法勝寺町、尾高町、四日市町、東・西倉吉町などは、戦国時代に伯耆国の城があった町の名前である。中村氏時代に領地内での集住が進められ、住民ごと町を引越したと考えられている。例えば、法勝寺町を形成した長尾氏は会見郡法勝寺から移り、長尾屋と称して広大な土地を所有した。ただしその町から移ってきた人以外も住んでいたようだ。

⑤「まち」の中心を走る広い道は、

さらにまちの北側には、九つの寺が並ぶ⑧「寺町通」が描かれている。これは横田内膳が領内の各地から移して配置したものとされる。現在もそのままの位置に寺が残り、「お寺銀座」とも呼ばれる珍しい光景をつくりだしている。

旧加茂川周辺は今も江戸から明治の佇まいをまちに残し、下町ガイドの案内によるまち歩きなども行われている。



米子城の面影を残す石垣



米子領地面全絵図(米子市立山陰歴史館蔵)



加茂川遊覧船



重厚な造りの後藤家



寺町通

現在も元町サンロード、本通り商店街、笑い通り商店街などとして同じ場所に残っている。本通り商店街のアーケード沿いには、格子戸や土蔵の建物が軒残っている。これは⑥大寺屋船越家住宅で、江戸後期建築（一部増築・改造）の豪商の家である。商家の裏口は外堀や加茂川に面しており、米子港に着いた荷を船から運び込んだり、発送する荷を運び出した。この水路は大正時代まで活用され、今も旧加茂川沿いには荷を保管していた白壁の土蔵や、荷物場の名残の階段などが残る。内町の⑦後藤家は特に大きな廻船問屋で、その財力を示す重厚な母屋・蔵などの建物が国の重要文化財に指定されている。外堀に架かる七本の橋のうち、京橋、中ノ棚橋、天神橋の三本はほぼ同じ場所に残っている。現在はこの水路や中海を巡る観光遊覧船が就航して

姫新線

兵庫県姫路市・たつの市・佐用町・
岡山県美作市・勝央町・
津山市・真庭市・新見市

姫路と新見を結ぶ長大ローカル線の姫新線。沿線には歴史的な町並みや鉄道関連施設など観光名所がそろそろ。



久世(くせ)―古見間の目木川を渡る列車 写真提供:JR西日本

京阪神と中国地域山間部を結ぶ「姫新線」

JR姫新線は、兵庫県姫路市の姫路駅と岡山県新見市の新見駅を結ぶ路線で、その距離は、百五十八・一キロメートルである。同じ中国山地を走る長大ローカル線の芸備線より一キロメートルほど短い。姫新線の路線は出雲街道にほぼ沿っており、もともと京阪神と中国地域山間部を結ぶ目的で開業されたが、中国縦貫自動車道が開通してその役目を終え、現在直通列車はない。姫路―上月、上月―津山、津山―新見の三つの区間に分かれている。姫路―上月間は昼間だいたい二時間に三本、途中の播磨新宮までだと乗降客も多く一時間に二本の運行本数だ。二〇一〇(平成二十二)年三月に姫路―上月間では、新型車両の導入や地上設備工事が施され、高速化事業が完了した。

一方、上月―津山間は、兵庫・岡山の県境の万ノ峠トンネルを通り、岡山県の三大河川の一つ吉井川を渡って津山に着く。津山―新見間は、山間地に開けたのどかな田園風景の中を走る。途中、丹治部駅を通り、そこから下って新見へ着く。上月―津山、津山―新見間は、姫路―上月間に比べると本数はぐっと減り、朝夕の通勤・通学の時間帯を除くと、二時間に一本くらいの運行本数である。

姫新線の歴史は、一八八九(明治三十二年)年に設立され、姫路―津山―米子間の敷設を計画した陰陽鉄道に始まるともいわれるが、実質的には、一九三〇(昭和五)年に全通した作備線(津山―新見)と一九三六(昭和十一年)年に全通した姫津線(姫路―津山)が同年一〇月に統合されて誕生した。なお、東津山―津山間は因美線の一部であったため、資料によっては三路線が統合されたと説明するものもある。

一九六〇(昭和三十五)年十月に準急「みささ」「みまさか」の運転が開始され、その後、急行に格上げされたものの、一九八九(平成元)年三月に廃止され、以後、優等列車は走行していない。

歴史的建造物や観光名所に恵まれた路線

姫新線の特徴としては、中国山地の山々や岡山三大河川(吉井川、旭川、高梁川)といったローカル線ならではの豊かな車窓を満喫できることとよ

り、歴史的建造物や温泉、桜の名所など沿線の観光資源に恵まれていることが挙げられる。

たとえば、津山駅周辺には、西日本随一の桜の名所として知られる津山城跡(鶴山公園)や出雲街道沿いの町並み保存地区、池泉回遊式の大名庭園「衆楽園」がある。

中国勝山駅周辺はかつての宿場町で、町並み保存地区に指定され、お洒落な酒蔵レストランなどが話題となっており、各店舗を飾る暖簾が温かな雰囲気を感じ出す。また、この辺りは高瀬舟の最上流の船着き場だったため高瀬舟発着場跡がある。

美作三湯と称される湯郷・奥津・湯原温泉も沿線に位置す



作図:小学館クリエイティブ



旧津山扇形機関車庫



湯郷温泉てつどう模型館&レトロおもちゃ館



勝山町並み保存地区



衆楽園



湯原温泉



中国勝山駅舎

懐かしい雰囲気を残す

上月―新見間

姫新線は、観光資源にも恵まれた路線だが、実際には沿線住民の利用が多

い。姫路―上月間は高速化され都会的なイメージだが、上月―新見間は、一両か二両編成の気動車がゆったりと走り、ローカル線らしい雰囲気を持つ。幅すれすれの長いトンネルを徐行して抜けたり、ガタンゴトンと優しく体を揺さぶったりする。取材で乗車した際に印象的だったのは、学生がとても多く、車内では話し声が絶えないことだ。「今、帰り？」と学生同士で声を掛ける親しげな様子が微笑ましく、そこに彼らの日々の生活が透けて見える。

山を走るローカル線というと、ひっそりとした落ち着いた魅力をつい想像することが多いが、姫新線は、狭い車内に集まった学生たちの話し声が響きあうにぎやかな路線であった。

(文・藤沢享乃)

一九八四（昭和五十九）年七月、島根県斐川町（現出雲市）の広域農道建設に先立つ発掘調査で銅剣が三百五十八本発見された。それまで、まとまって出土した銅剣数は最多で十三本、銅剣自体も全国で約三百本しか出土していなかったため、この発見は大きく報じられた。さらに翌年、そこから七メートル離れた地点で、一つの坑から銅鐸六個、銅矛十六本が出土した。これらの出土品は弥生中期末から後期初頭までに埋納されたと考えられ、青銅器の埋納状況が把握される貴重な発見例といわれる。

銅剣には出雲を中心に分布する同一の型式が見られ、三百五十八本のうち三百四十四本の茎（柄）に覆われた部分に「X」印が刻まれている。同様の刻印が確認されているのは、加茂岩倉遺跡出土銅鐸の一部のみであり、両地域集団の関連性や刻印の目的が注目される。

銅鐸は、弥生前期後半の国内最古式から中期中ごろのものまでが集められたとされる。また、銅矛のうち七本は、意図的に一定の幅で研磨の方向を変える「研ぎ分け」があり、見る角度によってさらさらと輝いて見える。九州北部出土の銅矛と共通する特徴である。

その後一帯は国指定史跡として整備され、荒神谷博物館が建てられた。出土品は現在、島根県立古代出雲歴史博物館に収蔵・展示されている。



写真提供：島根県立古代出雲歴史博物館